

[会員からの寄稿]

## 研究会理事になって

小 柳 理恵子

(日本農産工業株式会社 畜産技術センター)

All about SWINE 65, 31-32

このたび研究会の理事となりました，日本農産工業株式会社 畜産技術センターの小柳と申します。養豚分野の業務に就いて3年ほどになります。どうぞよろしく願いいたします。

私が勤務している畜産技術センターは茨城県つくば市にあり，敷地からは日本百名山にも数えられる筑波山（標高877m）が望めます。まるで猫の耳のような二つの峰は男体山，女体山と呼ばれ，古くから豊穰の神として信仰の対象になって

きました。山の中腹にある筑波山神社で春と秋に開かれる「御座替祭（おざがわりさい）」は，元々は山の神様から産まれた神子を里に迎える神事であったと言われています。人々にとって山は神様でもあり，いのちの営みによって里に豊かな実りを授ける偉大な生き物でもありました。

山が生き物であるのと同様に，養豚場もまた一つの生き物と捉えることができると思います。私が養豚の現場に触れるようになり特に感じるの



畜産技術センターより望む筑波山

は、養豚は群管理であり総合的な視野が重要という事です。例えば哺乳子豚の下痢ひとつを取っても、寒さや隙間風などの環境要因、母豚の泌乳状況や健康状態、感染症など、様々な要素を考慮する必要があります。病気だから薬で治療すべきだと短絡的に考えてしまうと、問題の本質を見失ってしまいます。

それぞれの豚は周りの豚と互いに影響を与えあって生きています。農場の各部門は協力して農場を成り立たせています。すべての要素がつながって一つの農場を動かしているのだと気づいたとき、農場全体が一個の生物のように思えてきました。私たちが体調不良のとき細胞の一つ一つを治そうとしてもキリがないように、養豚に関わる問題についても個体の現象を追うだけでなく群や農場全体を俯瞰する必要があります。養豚場の疾病管理とは、農場というひとつの生き物の健康管理なのだと思います。

さらに、農場を生き物に例えるならそこで働く職員の方々は神経と循環器だと思います。なぜなら人は判断し、情報を伝達し、必要な物資を末端まで届けるからです。スタッフ一人一人が全体の流れを把握していてモノや情報の流れに滞りのない現場は、生産性もよくトラブルからの回復も早いのではないのでしょうか。

私自身はつい目の前のことに気を取られてバタバタしてしまいますが、ちょっと立ち止まって大きな視点で物事を見るよう心掛けたいと自戒する毎日です。窓の外に見える筑波山のようにどっしりと落ち着いた心を持ち、実りの多い日々を送れたらと思います。

#### 参考文献

井坂敦實ら (2007) 「郷土の先達とゆく筑波山」  
結ボックス